

龍田美智子さんのこと

酒井 ただよし 董美

2011年5月23日・安来市の富田山荘で龍田美智子さんと

21日の「ほうき民話の会」定例会で龍田美智子さん（81歳）が退会の意思を表明された。会員の皆さんへの挨拶で、龍田さんはこう説明されていた。「これまで米子市に住んでいたのが、近年境港市の施設に転居したため、ほうき民話の会の語り発表会場の山陰歴史館まで遠くなり、運転免許を返納したこともあって、出かけるのが不自由になった」のが主な理由だという。

ちなみに上の写真は筆者が米子市の立花書院から『民話に魅せられて』―ある田舎教師の歩み―を上梓した折の安来市の富田山荘で開かれた出版記念会で、多数の方々の中でたまたま筆者と並んだ龍田さんの写真があったので、その部分だけをアップしたまでである。

さて、物事には「初めあれば終わりあり」である。この歴史的法則は、何人にも変えられない真理であるから、龍田さんの退会も、まことに残念ではあるが認めざるを得ない。龍田さんを考えるとき、まっ先に思うのは、実に卓越した語りテクニクの見事さには、常に他人の追従を許さないものがあつたことであろう。緩急自在で音量を加減した語りは、芸術的な素晴らしさがある。退会の挨拶の中で「みなさんの語りもとても進歩なさっています。語りは聴きに来られた一番後ろの人が充分聞こえる音量で語るべきです。そのためには腹式呼吸をしっかりと行って声を出すようになさってください」と述べておられたが、さすがに龍田さんだと納得して聴いていた筆者である。

彼女は筆者が本の学校で民話講座を開催したおりも受講され、平成14年5月に「ほうき民話の会」結成の最初からのメンバーで、一時、ご主人と共に離島の西郷町飯田（現在の隠岐の島町飯田）で暮らしておられた折、筆者が島後地区で民話講座を行い、その後、平成20年10月「おき民話会」を立ち上げるときにも、率先垂範、指導者としてフォローしてください、おき民話会の中心人物として活動してもらったものである。

語りの見事さでは、自他共に認める龍田さんが、このまま語りの世界から去るのは惜しみても余りあるので、そのことをうかがってみれば、「境港市で語りを続けておいでの足立茂美氏のグループに誘われており、時間を見つけてゆとりのあるときには、そこで語ってみようかと考えています」とのことなので、筆者としてはほっとしたところである。さらに許せば、たまには古巣である「ほうき民話の会」へゲスト出演で語るようにすれば、大歓迎こそすれ、反対する者は誰もいないはずである。

昨日、予想もしなかった龍田さんの退会挨拶を聴いて、これまでの会に対して行つてこられた貢献の大きさに心から感謝しながら、今後の彼女のさらなる発展を祈つて一筆した。（元島根大学法文学部教授）